

# 淨土

1991-2

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一週一日発行  
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別授受郵便誌） 第三二五号  
平成三年一月二十五日印刷 平成三年二月一日発行

第五十七卷

二月号





## 二月の秀句

加月の大雲の押す月夜かな

飯田 蛇笏

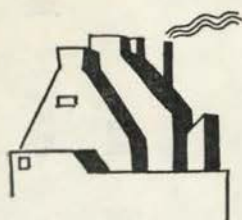
山川のとどろく梅を手折るかな

飯田 蛇笏

常楽会東国の旅に出て会へり

飯田 蛇笏

# 二月号



この三心ひとつもかけぬれば、往生をとげがたし。

——『念仏大意』

## 目次

### — 法 話 —

涅槃会に思う……………村瀬秀雄……(2)

(な)(む)(な)(む)(力)(メ)(ラ)(2)

おとうさんを写す……………ぬのむらてつや……(9)

### 《特別寄稿》

迷 信……………佐藤啓蔵……(16)

### 読者のページ

仏教經典の意義と浄土經典……………上野 浩……(25)

(ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話) [1] 涅槃会……………(24)

季語やぶにらみ (1)

初暦・年内立春

……………木下隆一……(33)

### ◇◇ 連載・話の旅(七) ◇◇

超常物語 ④……………松浦行真……(41)

表紙絵 小林治郎画

△法

話▽

# 涅槃会に思う



村瀬秀雄  
むら せ ひで お

釈尊は紀元前四八六年の二月十五日夜半に、拘尸城の近くの沙羅樹林において八十歳を一期として涅槃に入り給うた。折から集っていた弟子たちは勿論のこと、多くの獣たちまでが泣いて悲しんだ。生母の摩耶夫人は夫人たちと一諸に來つて、悲しみに堪えて見守っていた。二本の沙羅樹はあだかも白鶴のように白くなって枯れてしまった。このように夫人や弟子たちから獣や植物までが悲しんだということは、釈尊の慈悲と教化が広くすべてのものにまで及んでいたことをい

い現わしたものである。

釈尊はこの日のあることを早くから承知し給うていた。凡そ三ヵ月前のことであつたが、釈尊は阿難に向つてこの日に入滅するであろうことを予言し給うていた。釈尊が入滅し給うた直接の原因といわれているものは、前日に鍛冶師の純陀を教化した時に受けた供養によつて消化不良の病状を呈したことによつてである。釈尊は激しい腹痛に休養することがなく、病をおして沙羅樹林に赴いてから横臥し給うたのは、この日に入滅することを知っていたからであつた。ある商人が金色の絹の衣を奉つたので、釈尊がこれを着たところお身体までが金色に光り輝いた。阿難はこれを見て不思議に思い、何故であるかと問い奉ると、釈尊は今夜半に入滅するであろうと答え給うたという。この答えのお言葉を待つまでもなく、多くの人々は釈尊が入滅し給うたことを知っていた。善賢という遊行僧はこの噂を聞いて驚き、拘尸城を發つて釈尊の許に急ぎ赴いて教えを請うた。しかし阿難は大師が病床にあることを理由に面会の申し出を断つた。こうして三回も押問答を重ねたが、釈尊は阿難に命じて呼び入れさせ給うた。そしていろいろと説法し教化してから、異例といえる受戒を授け給うた。こうして善賢は釈尊最後の弟子となつたのである。

釈尊は弟子たちに向つて何か疑問に思うことがないかと問い給うたが、一同は

黙っていて口を開く者がなかった。これは弟子たちに何も疑問とすることがなく、すべてよく理解していたことを態度で示したものであった。釈尊は三十五歳の時に苦行主義を捨てて中道の道を修行することによって悟りを開き、法を聞く相手の素質に応じて或いは小乗の教えを説き、或いは大乘の教えを説き、各地を遊行している間に数知れない多くの人々を教化し給うた。しかしながら釈尊最後の説法を記した經典であると伝えられている遺教経には因縁の道理でもなく空の真諦でもなく、心身を制御して煩惱をなくするように努めることこそ人々にとって大師であると説いている。そのためには享樂を追いつめてゆく放逸な生活から離れ、欲望を少なくして僅かなもので満足し、時を惜んで精進しなければならぬと説いている。例えば飲食を受けたならば薬を服用するつもりで口に入れ、怒りや恨みの情をなくし、憍慢の心を起すことなく、他におもねることなく、すべての戲論を捨てるようにと教えている。こうした日常の生活の基準を説いてから、生あるものは必ず滅するものであり、会う者は必ず離れ去ってゆく無常の姿を明かしている。そして説いていうのに、もし人々が仏の教えを行じて止めないならば仏の法身は常にましまして滅することがないと述べている。

これとは別に釈尊の遺教としてよく知られていることは「法を光りとし、より

どころとせよ。自己を光りとし、よりどころとせよ」という一句である。釈尊の身体は入滅し給うた後には見る事ができなくても、法はあらゆる世界を明るく照らしているので、滅びることなく常住しているのである。常住する法に帰依して修行している者は世界を明るく照らし、悟りへの道をあくまで進んでゆけるのである。法華經寿量品によれば、釈尊が入滅の相を示し給うたことは人々を教化するための方便であつたと説いている。この教えによれば釈尊は久遠の昔に成仏してから教化を続けてきたが、今後同じく滅びることなく常住して法を説き給うているのである。しかし、釈尊が常住している姿のままでいると、人々は仏になれて憍慢の心を起して勝手気ままに振舞うようになり、遂には怠惰になつて自ら法ら求める心を失うことになる。このようにならぬために釈尊は入滅の相を現わし、人々が仏に逢うことは難しいとして恭敬の念を起させようとするのである。釈尊の姿を見ることができなくても、釈尊が法を説いていることは今も昔と変わらないのである。こうした經典の教えとは別に釈迦回向文に説いていることは仏の寿命は去ることもなく、また来ることもない常住の法身であると説いているのも同じ意味である。

善導大師は二河白道の譬喩を説いて、釈尊の姿を拝することができなくとも、

今もなお人々に念仏を唱えて極楽往生を願うようにと勧め給うてゐるとしてゐる。

「曠野に一人の旅人があつて、遠路はるばる道を急いでいると忽然として目の前に二つの河があるのに出逢つた。一つは火の河であつて、南の方に向つて果しなく続いてゐた。他の一つは水の河であつて、北に向つて果しなく続いてゐた。

河巾はともに反歩ばかりであつて、底知れぬ深さがあつた。幸い二河の中間に東から西に向つて巾四、五寸ばかりの白道があつた。しかし水の河が波をたてて道を洗い、火の河が焰をあげて道を焼いてゐた。

旅人は西に向つて逃げたくても、白道の巾が余りにも細いために、反歩の河巾を渡る内に水の河か火の河に落ちるであらう。河に添つて逃げたくても、後から追つてきた群賊や悪獸に殺されてしまう。旅人はこのまま留つていても死ぬし、逃げてでも死ぬことに間違いない。同じ死ぬならば白道を進むしかないと心に決めた。旅人は思いきつて白道を渡ろうとすると、東岸に人の声があつて勧めてゐるのに、『仁者よ、心を決めて白道を渡つてゆくがよい。必ず死の難から免れるであらう。もし留つていれば群賊や悪獸に殺されるだけである』と。すると西岸に人がいて、旅人に呼びかけてゐるのに、『汝は一念に念仏を唱え、白道を渡つてくるがよい。われは汝を護るであらう。水火の二河には畏れなくてもよい』と。

旅人は東岸の人の声に早くそこから去るように勧められ、西岸の人から早く来るように呼びかけられ、不思議に勇気がわいた。旅人は心を決めて渡ってゆくと、危げにみえた長い白道を僅かな間に渡りきって西岸に到達することができた。この喩えにおいて東岸の人の声を聞いたというのは、釈尊が人々に念仏を勧めて往生を願わせる声である。西岸に人がいて、旅人を護って白道を渡るように励ましているのは、阿弥陀仏が念仏往生の本願を成就し給うていることである」

このように釈尊の姿は見えなくても念仏を唱えて往生するようにと勧め給うているのである。釈尊が念仏の行を勧め給うているというのは、念仏は誰にでも修められる行であり、しかも必ず往生できるという大きな功德が見えているからである。そこで法然上人は津戸の三郎為守に遣わした返事の中で次のように説いている。

「釈尊のこの世に現われ給うたのは阿弥陀仏の本願を説いて、念仏の行を勧めようとするみ心からであった。人々の能力に応じて説き給うた隨機の法は、決して釈尊ご自身の心底から説き給うた教えではない。このように念仏は阿弥陀仏がすべての人々を救うのにたて給うた本願の行であり、釈尊にとっては出世の本懐の教えである」

## ◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十七巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

なむなむカメラ  
(二)

おとうさんを写す



ぬのむらてつや

ひかりに向ってなむなむ。そしてシャッターをおす。すると カメラの中へすうーと入る。

なむなむカメラは なんとふしぎなカメラでしょう。こんなカメラはだれも見ただことありません。世界中をさがしまわっても みつ

けることはできないでしょう。

もちろん何万円何十万円 いや何千万円何億円を出しても買えないのです。

そんな珍しいカメラのあることを知ったのが 私たちのけんちゃんなのですから すばらしいことではありませんか。

しかもそのカメラは そのへんどこにでもあるカメラとぜんぜんかわっていませんのですから おもしろいですね。

「さあ みんな座ってすわって」

おとうさんが 大きな声でよんでいます。

「日曜日の朝ぐらいゆっくり寝ていたいのになあ」

と目をこすりながら けんちゃんが部屋へ入

っていくと おとうさんが

「なにをぶつぶついつているんだ。さあみよこを起しておいで。そしておかあさんにも声をかけて」

台所からは トントンと食事のしたくをしている音。

「おとうさんが座ってって」

「ハイハイいま行きますからね」

おみそ汁の菜っぱをきざみながら返事をしてくれます。

妹のみよちゃんの部屋の戸をドンドンとたたいて

「おとうさんが早く起きてこいって」

「ハイイ いまおきます」

まだ半分ゆめを見ているような声です。

これでは まだまだそろいそろいもありません。お腹はぐうぐう鳴っていますが ご飯は食べられないのです。

なぜならば けんちゃんの家では日曜日の朝はかならずみんながそろってお仏壇の前へすわり おまいりをしてから食事になるのです。

「なんでこんなことをしなければならなのかなあ」

とけんちゃんはおもいます。

足はしびれるしお腹はすいてくるし 手をあわせてもちっともいいことがあるとおもわれません。

もし手をあわせてお仏壇の中から どんどんとケーキが出てくるならば いくらでも手をあわせます。妹のみよこだって だいすきな着せかえ人形たちがすてきなドレスで ぞろぞろと出てくれば とび起きてくるにちがいありません。

そんなけんちゃんのことを ちっとも考えていないようなおとうさんは お仏壇へお水をそなえ ローソクに火をともし お線香を立てておまいりのしたくをしていましたが うしろをふり向くと

「そろわないけれど始めるか」

といいながらチーンと鐘をならしました。

おとうさんは手をあわせると 「なむなむ

なむ」ととなえます。

その声を耳にして けんちゃんがおもいだしたのが なむなむカメラのこと。ピカリのなむなむのことです。

おとうさんのおまいりは まだまだつづきそうです。おかあさんは台所でのごとごとやっていますし みよちゃんも起きてきそうもありません。

そおーつと部屋をぬけだしたけんちゃんは茶の間からカメラを持ってくると おとうさんの声にあわせて「なむなむなむ」といいながらレンズをローソクの光にむけて 「カシヤ！」とシャッターをおしました。

その音におどろいたおとうさんが おもわ

ずうしろをふり向いたときには すでにけんちゃんのすがたはありません。

ただカメラだけがあります。

「まだどこかへ行ってしまったな」

しょうがないといった顔でおとうさんはおまいりをつづけています。

そのとき けんちゃんはもうカメラの中へ入っていたのです。いっしょにいるのは ピカリのなむなむ。すがたは見えませんが仲よしの友達です。

「けんちゃんとは お正月に始めて会ってこれが二度目ですね」

「そうだね。けさお仏壇におまいりをしていて ローソクの光と なむなむの声で きゅ

うに君のことをおもいだして　ここへ来てしまっただ」

「けんちゃんはいらいよ。ちゃんと手をあわせて『なむなむ』といえるんだもの」

「そうでもないんだ。おとうさんがいうのでしたかなくやっているだけだよ」

「カチャ！」という音といっしょにまわりがあかるくなり　一枚の写真がうつりました。

そこに写っているのは　どこかで見たことのあるような家です。

「さあ玄関から入ってみよう」

ピカリのなむなむに手を引かれるようにして写真の家へ入っていくと　これも見たよう

な男の人が茶の間のコタツにいます。茶の間のようすも　どこかで見たような気がするのですが　おもいだしません。

玄関で音がして入ってきたのは　これまたどこかで見たことのある女の人です。

二人は話をしています。

「まだ学校から帰ってきませんか。あの子の好きなほかほかの今川焼を買ってきてやったのに。早く帰ってくればいい」

と女の人がいうと　男の人は

「きつと友達と道草でもしているんだらう」といいながら　お茶を飲みました。

ガラガラ　玄関があくのと同時にドシンとランドセルをほおりなげる音がして　こんど

はエーンエーンという泣き声です。

女の人が玄関へとんで行くと 男の子をかかえるようにして茶の間へ入ってくるといういました。

「学校のかえり道で 友達とけんかをして足をすりむいたんですって。早く赤チンをぬってやらなければ。いたかっただろう」

「なんだ そのくらいのことです泣くんじゃないぞ。どれどれ」

男の人は そういいながらも箱から薬を取り出すと足にぬっています。

立ったままの男の子は まだ両手を目にあってシクシクやっていました。

「ほら お前の好きな今川焼だよ。焼きたて

だからおいしいよ」

そういわれたとたん それまで泣いていた男の子が やにわにコタツの上の今川焼をつかみました。

「あっ！」

その男の子の顔を見たけんちゃんは さけびました。

その顔が アルバムにはってあるけんちゃんのおとうさんの 小さい時の写真の顔とそっくりだったのです。

そうです。これはまちがいなくおとうさんの子供のころです。そうならば 家も茶の間もけんちゃんの家のはずですし そこにいる男の人はおじいちゃん 女の人はおばあちゃ

んです。アルバムの写真とみんな同じです。

だから どこかで見たことがあるとおもったのです。

立ったまま今川焼をほおぼっている男の子を見ながら けんちゃんのそばにいるピカリのなむなむが くすりと笑っています。

「けんちゃんだけが食いしん坊かとおもっていたけれど これは遺伝だということがはっきりしましたね。」

「やっぱり 見えない糸でつながっているのかなあ」

けんちゃんはそのいうと しずかにシャツターをおしました。

カチャッ！

お仏壇の前でのおまいりが もうすぐおわります。

おとうさんも おかあさんも みよちゃんも もちろんカメラのそばのけんちゃんも 手をあわせて なむなむなむ。

おとうさんは いまけんちゃんが見てきたことなど すっかりわすれているでしょう。

でも けんちゃんには おとうさんのやっ  
ていることが少しわかったような気がしました。  
お仏壇の中のおじいちゃんやおばあちゃん  
が にこにこ笑っているのが見えたから  
です。

(つづく)

## 迷 信



佐<sup>さ</sup>  
藤<sup>とう</sup>  
啓<sup>けい</sup>  
蔵<sup>ぞう</sup>

小学生のころ、田舎道で人魂を見たことがある。

Nさんの家の屋根から青白い光の玉が上空に舞い上がり、風に吹かれるように、西に向かって飛び去った。

二、三日して、Nさんのお婆さんが亡くなったことを聞いた。そのことを学校で先生に話したら、笑ってとりあってくれなかった。

中学二年生の時、二月の寒い夕方だっ

た。母の言いつけで、嫁いだ姉の家に足袋を届けに行った。その途中、大きなお屋敷の塀に沿って急いでいると、塀の中から、三十センチほどもある透き通った青白色に燃える人魂が、あたりを白々と照らしながら塀の中に消えた。

帰宅して母にそのことを話すと、「塀の家で、どなたか亡くなったかもしれない」と言った。

私の家に先祖伝来の薄汚れた仏壇が仏間に置かれていた。四番めの姉が亡くなる前日の深夜のことである。母は胸苦しさで目を覚めた。床の間の方を見ると、その床柱に、小さな人魂が震えるように付着していた。

やがて、畳と床柱の隙間から二ツめ、

三ツめと湧き出てきた。そして縦に三ツ並んだ吊り提灯のように、いつまでも小さく揺らいでいたが、母が掌を合わせて目を瞑っていると、いつのまにか消えていたという。

姉はその日の早朝に逝った。

また、私が二十一歳の時である。下痢が止まらなくて困ったことがあった。医薬を一カ月以上飲み続けても一向に好転せずに痩せ細り、心身ともに疲労しきっていた。

母は、目の落ち窪んだ私の様子を心配して、盲目の易者にお伺いをたてて貰った。

私は家莊さんというこの易者は知らないし、家莊さんも私を知らない。が、易

者は紙片に書かれた私の姓名と生年月日を、指先で摩りながら神棚に向かってお祈りを始めた。

「お告げを伝えます。朝三時（午前三時）に、あなたの家の南にある井戸水を、コップ一杯汲み、家の真ん中の部屋で、机に蠟燭を二本立て、東方を祈ってから、コップの水を飲ませなさい……。それで直ります」

と宣われたという。

そんなこととは露知らず、私は、深夜に起こされて水を飲んだ。すると、五、六分も経ったころ、腹中の物が一物も残さずに悉く放射され、腰が抜けたようになつて立ち上がれなくなつた。

廊下で待機していた母に援けられ、悪

惑のする体を布団に潜らせて朝になつたが、しばらく熟睡したらしい。

目覚めの気分は爽快だった。障子に映る梢の影が静かに治まっている。遠い人声の中に、近い小鳥の囀りを聴きながら、私は、地獄の責め苦から解放されていることに気がでいた。

その後、四日ほどで普通食になり、通学できるようになった。

私は迷信を殆ど信じていなかったが、この事があつて以来、迷信を一笑に付する訳にゆかなくなつた。コップの井戸水に、何か化学的根拠があつて、偶然に一致したにせよ、医薬で直らなかつた病気が、日ごろの飲料水で治癒するということとは、明らかに迷信療法だからである。

このことが、靈力とか神通力といったものに結び付くなら、絶対に目撃できない絶大な力の存在が、人間界の外から、人間を操っていると思えないからである。

人間がなにもものに操縦されているなら、「死」も操られた果てのもので、何ものかによって殺されたことになる。たとえ自然死であったとしても……。

「死」と名指せる物体は灰になっても、靈力が存在する限り、靈魂を消却することはできないと思うのである。

あきな浅慮な思考かもしれないが、人魂が単なる化学的物質であったにしても、死人の家から人魂が浮遊する事実を、「靈魂の変幻」と憶測しても差し支えないので

はないだろうか。

これを否定する人は、人魂を網で捕えて、メスで解剖し、顕微鏡で覗かねばならない。それは夜空の流れ星を、ジェット機で追い駆ける愚に均しいのである。

当たるも八封、当たらぬも八封は、五十パーセントの確率で、三千年の昔から語り継がれてきたが、その本質を誰も理解しようとはしなかった。

靈魂の存在を肯定する意識とは、理解できないことに対する願望である。この願望は人間の往生世界に生まれ変りたい靈力の働きなのかもしれない。

浄土宗の開祖、法然上人は、「往生とは極楽浄土に生まれ変わるといいうのは確実だが、不確実といえは不確実なもので

ある」と説いている。「願望」もまた靈力の働きのなか。

願望に由来する迷信も、辛酸をなめ暮らす不幸の中で、微かな仕合わせを見出す努力をする人に授けられる恩恵かもしれない。

宗教と背中あわせの迷信は、その辺から産まれた神の啓示かもしれない。

とり巻く環境の中には、多くの身心を悩ます欲望がある。

自分の環境から逃がれて生きることのできない人間は、空気のように付き纏って離れようとしないう望からも逃避できない。

無欲無望の悟りを得なければ、煩惱は煩惱を生み、人間性を見失うのも当然か

もしれない。そして見失った一隅の小さな灯を信ずべき迷信にしつらえているらしい。

人間性の中に、「正直に生きる」という基本的な倫理がある。この基本論の「正直」を、やみくもに徹底しようとする宗教があると、中学時代の校長先生の訓示を聴いた記憶があるが、正直に生きようとすればするほど煩惱に追いかけるように思った時代があった。

死ねば井一杯の灰になることと、仏教がどこで撃がっているのか。仏教のあるべき要旨も知らずに、この先に往生の世界があるということを否定して、外観思考の無神論に傾倒していた時代の私には、迷信というものは存在していなかつ

た。

迷信というものが、多少でも信じられるようになったところ、幽霊の存在は楽しみの一つにしたことがあった。幽霊の実在を肯定しても笑可しくないと思うようになって、私自身の幽霊を見たことがある。

それは、酒を汲みかわす息子の姿であった。息子目の中に「私」が生きている。私自身であるような、ないような私。ぎょっとするほどよく似た言動があるかと思えば、赤の他人のような私の変幻がそこにいるという事実。紛れもなく私の幽霊に違いないと思った。

迷信の信が宗教を導くものだろうか。そんな過去から、疑問視しつつ宗教を捨

てきれなくなった。

だが、若い時代も八十路の今も、仏教の基本的観念というか、人間を根底で支えている宗教は皆自分からないということと、信者としての信仰心の自覚も希薄なまま老い呆れてしまったらしい。

「阿弥陀」とか「無量」といった仏教語の意味すら理解できずに煩悶しているのは、「宗教」と「迷信」をどこかで結び付け、疑心暗鬼に侵された心の迷いからだろう。

過日、図書館で見た仏教辞典に、「阿弥陀は無量と訳される」とあり、「無量寿」と「無量光」の意味を併せもっているという。

大乘経典である「阿弥陀経」の一節に

は、「彼仏光明無量、照十方国、無所障礙、是故号为阿弥陀」となっているから、仏の光明は多くの国の人々を、分けへでなく照しているということである。

この光明は常日ごろ、万人が平等に浴しているのに、偶老のごとき凡夫には氣付いていないという意味らしい。

そういえば、ことあるたびに参詣する浄土宗大黒山戒善寺には、「月影の至らぬ里はなけれども、眺むる人の心にぞすむ」という宗歌が掲示してある。

この宗歌に接するたびに釈迦のお叱りを浴びているが、「眺むる人の心にぞすむ」という後句は、「そのことを自分で理解せよ」という意味がこめられているように、仏教の他力本願だけでは仏意の

真意は伝わらないことを教えているらしい。

私の若い時からの自信は自力本願であった。他人の力を借りる贅沢が許されなかった貧乏暮らしも、戦死の増嶋<sup>もつぼ</sup>を彷徨した時代も、死生観は自力本願で、自力が総てを解決すると思っていたが、仏教では他力本願であった。

自分で自分を操舵できない宿命を背負った人間なら、他力という仏の力を借りるより外に道のないことを教えているのである。

これは、真実と思えば真実で、不確実な迷信といえは迷信かもしれないが、「死」の儘ならぬ觀念からは、真実として他力本願に頼るほうが、「生」を樂し

む方策が生まれ易いような気がする。

「正眼法藏」は、「一切の衆生は悉く仏性あり」という。二千数百年の昔から、インド、中国を語り継いで、「あるもの悉く仏性」という哲理は迷信ではなかった。迷信的靈魂の存在すら、「魂とは七生に生きる」と信じられても不思議ではない。

人体が生命を保ち、心の働きを司どることは束の間の世界でも、肉体に宿る魂は、祖霊を経て永遠の靈魂になるということに眞実性があると思うのである。そう思うことで人生は楽しめるものだ。知らないうちが花だった時代もあったが、知って信ずる仕合わせもあった。心酔して悪いはずのない信仰の心境

は、愛する人に巡り合った歓びに似ている。

「人はパンのみで生くるものに非ず」と、キリスト教のマタイ伝にある。精神の抛り所の有無で人の環境は変わるようである。

「きんめいとうらい帰命頂礼」できるか否かは、愛するものを探し求めることから始めねばならない。

迷信が信じられるようになって、仏教を愛せるようになった。

愛するものを信ずることによって、礼拝の鐘の音が虚無色でも、寧ろ心持ちよい清浄感に打たれるようになった。

何故？、多分、迷信の恩恵かもしれない。

（ひ）（と）（く）（ち）（俳）（話）（１）

涅槃會

勝崎裕彦

二月十五日を釈尊入滅の日とする。釈尊仏

陀が八十年の生涯を閉じて、涅槃に入られた日である。この日、各寺院では涅槃像を拝し、『遺教経』を誦し、涅槃會を営む。釈尊涅槃の様子、經典では『大般涅槃經』などにくわしく説かれ、読むものだけれどもが深い感動を抱かずにはいられない。沙羅双樹の下で入寂された寢釈迦を囲んで、仏弟子や大衆、天地に生をうけた諸天鬼神、禽獸虫魚など五十二類にも及ぶ生きとし生けるものが、悲し

みに暮れ、愁いに嘆くありさまは、涅槃図や涅槃絵によってよく知られるところである。鶴林の夜半に梅檀の煙、去りし仏をはるかに思い、あらためて二月の別れを偲ぶことである。

涅槃図に東の間ありし夕日かな（敦）

涅槃仏を見ていると、そのやさしい面差しに心の中から暖かくなる。仏の別れの悲しみも、私には少し遠いことのようにも思える。おん顔を、ありし日の恩師の顔に写してみる。写真でしか知らない祖父の顔を思い浮かべてみる。そして、亡き父の最期の顔を思い起こして、静かに手を合わせる。

涅槃會やひとつ静かな経を読む（裕彦）

## 仏教經典の意義と浄土經典



上野<sup>うえの</sup>

浩<sup>ひろし</sup>

わが国においては人が死ぬとその葬儀を仏式によっておこなうものが多い。仏式による葬儀の場合、まず僧侶が登場

し、美しき袈裟をまとい、ながながと仏教經典を誦する。經典を読む僧侶の声は美しく、またおごそかにひびく。その

声をきくと会葬者もまた厳肅な気分になり、これで死者の霊は浮かばれ、死者を充分慰めることができたと思って満足する。

また、寺では毎日僧侶が修行をかねて經典の読誦をし、さらに各種の年忌、あるいは法要なども大きな仕事になっている。例えば、盂蘭盆会、施餓鬼会、灌仏会などに多くの信者が参集するが、このようなときにも僧侶は熱心に經典を読誦してくれる。中には読誦の声に唱和する信者もいる。それならばこのように読まれる經典なるものは一体いかなる意味をもっているものであろうか。ここに少し

考えてみたいと思うのである。

仏教經典（仏教聖典）はインドにおこり、中国を経てわが国に渡来した仏教に関する文書である。これはわが国のみならず広く東方諸国にまでも分布している。仏教聖典の数および分量は膨大なものであって、現在わかっているものだけでも全部合せると八万四千十二部になるといわれ、その中、短いものは数十語のもの、長いものになると数百頁に及ぶものもある。そして經典の中には、インドの言葉のストトラ（經）のほかは律、論を合せて三つあり、これを三藏といい、これで仏教聖典が構成されている。

わが国では仏教聖典のことを一般に、「お経」といつている。それではお経とはどういうものか、簡単にこれを説明しよう。これらの大部の経に書かれているものは、多種多様であつて、すなわち宗教文学、哲学は勿論、教訓、説話、たとえ話、笑い話、小説、戯曲、歴史、地理、民俗、習慣など人間生活の各方面にわたつての記事が載録されている。この大量の文献はすべて仏陀（釈尊）の説かれた記録であるといわれているが、しかし仏教聖典の全部が釈尊の忠実な記録でないことはうたがうことはできない。特にその中の一部のものは、釈尊の思想に近

い釈尊以外の他の仏陀が書いたものという説もある。それではいかにしてこのような大聖典が成立したのであろうか。それをたずねてみよう。

釈尊入滅ののち、釈尊の教説の乱れることを恐れ、釈尊の主な弟子たちが集つて聖典の編集に着手した。そして釈尊入滅後、一、二世紀の間は純粋な教えが存続していたのであるが、その後教団の内部に異論が生じ、教団の保守派の上座部と進歩派の大衆部とが分裂し、さらにまた数世紀にわたつて分裂をくりかえし、両者合せて十八の部派を生じ、これに従来の二部を加えて小乗二十部といわれ

た。ところが西暦紀元ごろ、上座部にも大衆部にもあきたりない一団のものが、別の聖典をつくり、自分たちを大乘、古いものたちを小乗といつてこれを軽視したのである。これが大乘仏教の興りである。さらに大乘仏教が分裂し、最後に密教が出現した。しかし大乘仏教といつてもその中にはさまざまな系統の区別がある。

さてわが国においては仏教伝来以来主として大乘仏教が行なわれてきた。そして大乘仏教の中でも万人成仏をうたっている大乘の重要な教えは浄土教である。そして現在に至るまでもわが国の人々か

ら愛敬されているのも浄土教である。したがってここで浄土教の仏典について少し考えてみよう。

浄土信仰といえは現在では阿弥陀仏に対する信仰が主であるが、この信仰が成立するまでには種々の仏陀(如来)についての信仰があつた。例えば過去仏としての釈尊の靈山浄土、大日如来の密厳浄土、阿閼如来の阿比羅陀国、薬師如来の浄瑠璃世界、また弥勒菩薩の弥勒浄土、観音菩薩の観音浄土というようなもの、そして阿弥陀如来の極楽浄土などである。しかし後になってこれらの浄土はほとんど阿弥陀如来の極楽世界にとつてかわられ

たのである。

阿弥陀如来の浄土教に関する經典は現在三種ある。その一つは無量寿經(大經という)、そして阿弥陀經(小經という)、および觀無量寿經(觀經という)の三つである。

### 無量寿經

大經の内容は、むかし世自在王如来のとき、一国の王だった法藏という出家修行者が仏陀になろうとし、多くの仏国土のうち、自分の最も理想とする仏国土建設の誓願をたて、それが成就して現在西方に極楽という仏国土をたてている。こ

の国土の描写がこの經典の主要部分であるが、これに関連して阿弥陀仏の四十八の誓願が述べられている。この四十八の誓願というのは、何れも衆生が極楽往生を遂げることのできる願である。そのうちの第十八願、すなわち「たとい、われ仏となるをえんとき、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生れんと欲して、乃至十念せん。もし生れずんば正覺を取らじ。ただ五逆(の罪を犯すもの)と正法を誹謗するものを除かん」という念仏往生の願は本願中の王としているものが多い。

## 阿弥陀經

小經は大經を簡略にしたものである。

極楽世界の状況を詳しく述べている。そしてその仏国土のことをきき、善男子、善女人などは発願し、阿弥陀の名号をきいて、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日一心不乱に唱えらると、臨終に際し、阿弥陀仏等に迎えられ、この人は極楽に往生することができると教えるのである。

## 観無量寿經

観經は東アジアにおける阿弥陀仏の淨

土教の成立にとって最も重要な資料となつた。この經典は明らかに大經を予想してつくられたものである。

その内容はインド、マガダ国の王、ビンビサーラの妃ヴァイデーヒ（韋提希）を主人公としている。この經典は次のように物語る。ビンビサーラ王の息子、アジャータシャトルは悪人にそそのかされて父を幽閉し、さらに父を心配する母をも幽閉する。母の韋提希は苦しさのあまり、仏陀（釈尊）に祈りをささげる。すると仏陀は直ちにその前に姿をあらわす。そして仏陀は西方極楽淨土に生れる方法として、一般の人が心統一して淨土を觀

想する十三の方法と散心の凡夫が往生を得る九種の方法、すなわち、上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生の方法を、釈尊は韋提希夫人に説いてきかせたわけである。この九品のうち、特に下品下生の項には「至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して『南無阿弥陀仏』と称えしむ」と凡夫を教える語がある。しかし、これは法然上人などの語をかりると、私共はすべて散心の凡夫の自覚をもつべきで、法然上人自身も「おのれは愚痴の法然」といっておられるくらいで、この観経は実は下品の人

間を対象としたものであるといわれている。

ところでこの経の下品上生の項に、下品下生の項と同様、「南無阿弥陀仏」の語があるが、經典中「南無阿弥陀仏」の語がでるのは他の經典にはなく、観経中の下品上生、および下品下生の項にのみ、「南無阿弥陀仏」の語がみられるのである。これは注目すべきことであって、親鸞の浄土教は大経を主としているが、観経を無視してはその浄土教もなりたにくいくいことになる。

お経とはこのようなものである。とこ

ろでわが国で仏教經典が使われる用途としては前述のように儀式に僧侶が読むくらしいものであって、儀式に参会の人々も僧侶の美声にききはれるのみである。そして經典の内容はいかなるものかを知らず、その内容を知ろうとせずすぎてしまう。しかしインドから中国をへて伝えられてきた仏教經典は、中国においては全部漢文に翻訳し、現在の中国には原語の經典はほとんど残されていないときく。これに比してわが国は中国から伝来した經典をそのまま漢字で受け入れて、全く和文に直すこともなく今日に至っている。わが国では、和文に直してその内

容をよくかみしめる必要がなかったからかもしれない。

しかし考えてみると、仏教經典に盛られている内容は釈尊の教えであり、あるいは釈尊の教を奉ずる他の仏菩薩や高弟の教えが書かれているものである。したがって私共は經典の内容をよく理解し、その教えを身に体して、すべての人が理想的な人間になるということが望まれることである。これが、仏教經典に対する私共の正しい態度ではないかと思う。なんとしても、私は宝のもちぐされにしたい。

季語やぶにらみ(+)

初暦・年内立春

木きの  
下した  
隆りゅう  
—いち

(随筆家)

暮に酒屋が来て、平成三年のカレンダーを置いて行った。一昨年医者に忠告されて以来とんとご無沙汰しているのに、律儀なことではある。大手の酒造会社辺りが大量に作り、

それに特約店の名前を刷り込んで配ったものをお裾分けに預った形になるが、大学ノート大のペラペラした紙質の本体はともかくとして、ちゃんとした美人画をあしらった台紙は、一

年間壁にかけて鑑賞するにはかなり努力を要するので、毎年私は「有難う」と言って受け取るだけで、読み捨てた新聞紙と共に処分されるのが落ちであった。

しかし、平成三年の酒屋のカレンダーは、ひょんなことから私の手許に残ることになった。何気なく開いてみて、意外に多くの情報盛り込まれているのを知ったからである。

「一月一日」を例に挙げると、祝日を示す赤いの1字の左側に、赤字で書かれた元日の文字を赤枠で囲み、その横に「旧十一月二十六日」、また1の右側には「八白・友引・ひつじ」、更に下段には「初詣・年賀・満月」と小さく記されているのである。この「満月」の文字があったばかりに、このカレンダーは命脈を保ち得たのであった。

月の満ち欠けに関しては、海釣りをやるわけではないから潮汐の大小や干満を意に介することはないのであるが、句作の上で何となく気になるのが月齢である。春の月といった場合、それがいかなる月齢の月であるかは問われないが、作家の意識の中には絶えずそれが働いていて、残りの十二音で、直接的に間接的に月齢を表現するのに腐心している。だから、上弦の月と下弦の月とを見誤らないためにも、また満月前後の月齢の月を見て、満月なのかどうかと悩まないためにも、この表示は重宝なのである。

ただ、その他の記載については、我々の年代でさえ、全く珍紛漠なものになっている。不勉強の謗りは免れないが、「八白」が分かるぬ。「友引」って何だ。「ひつじ」は「未」

で十二支の第八番目ということは知っていても、子・丑・寅……と暗記しているだけのことで、深い意味は知らない。この三つの中で、現在多少とも生活に関わりがあるのは「友引」だが、それも葬式を忌む程度の知識しかない。

へこれは一つ調べてみる必要があるな

早速、例によって広辞苑のお世話になる。

友引Ⅱ暦注の「六輝」の一。相引で勝負なしとする日。朝・晩は吉。昼は凶。友を引くといつて俗に葬式を営むのを忌む云々。

へ「六輝」?! それにしても俗信以外は別にどういうこともない日ではないか。ところで「六輝」とは?……

こうなると、「六輝」が気になって、メモのノートはだんだん増えていく。

六輝Ⅱ「六輝」とも。「大安」万事よし。

「赤口」大凶。正午のみ吉。「先勝」午前吉。

午後凶。急いで吉。「友引」前出省略。「先

負」平静を守って吉。午後吉。「仏滅」勝負

なしの日。万事凶。――の六星をいう。中国

の「小六壬」が日本に入って変化したもの。

江戸後期から一般化し現代に至る云々。「小

六壬」がいかなるものか調べようがなかった

が、恐らく陰陽道から派生した説であろう。

「大安」は万事よしの日として、今でも結婚

式場は大盛況であるが、離婚率は年々増えて

いるというからあまり当てにはならない。日

本人に生まれた限り、「成人の日」は人生の一

応の節目の日となるが、今年の成人の日は

仏滅であった。行政が目論んだほど若者は成

人式に出席しなかった。日が悪かったという

人もいたが、若者は来賓の殆どがこの春の統一地方選挙の出馬予定者なのを知って敬遠したのである。行政のやり方に、若者は仏滅ならぬ幻滅を感じていたのかもしれない。

へシンプル イズ ベスト。単純なるを以て良しとすか?!」

広辞苑から「五行」のメモを取りながら、そう思った。

五行Ⅱ中国で古來說かれてきた哲理。(イ)五行説。天地の間に循環流行して停息せぬ木・火・土・金・水の五つの元気をいい、万物組成の元素とする。(ロ)五行相生。木から火を、火から土を、土から金を、金から水を、水から木を生ずるを相生という。(ハ)五行相剋。木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に剋つを相剋という。(書経の洪範にその

名が見え、戦国時代の難行等が主張。陰陽家ではこれを男女の性に配し、相生のものと相合すれば和合して幸福あり。相剋のものと相対すれば不和で災難がくるという。)

仏教で言う、流転・輪廻に通じる単純にして明快な論理である。

「九星」(九曜星)Ⅱ一白(水星)二黒(土星)三碧(木星)四緑(木星)五黄(土星)六白(金星)七赤(金星)八白(土星)九紫(火星)に至っては、メモしたもののさっぱり分らない。「陰陽道で九曜星を五行・方位に配し、これを人の生年に当て吉凶を判断するもの」と言われれば、「はあ、そうですか」と答えるしかない。なぜか、昭和七年(壬申)生まれの私の星は、五黄土星なのだそうである。「この星の生まれの者は性質寛仁で運氣が強いと

される」と但し書されているのは嬉しいが、自分の過去を省みて、果たしてそうかな、と疑念を覚え、戸惑いを感じる。

〈結局は「神宮暦」に頼るしかないか〉

昔は十二月になると、本屋の店頭に山積みされていた「神宮暦」を思い出して暮の街をさまよってみたが、ずっと高く積まれているのはどうでもいいような週刊誌だけで、「神宮暦」のかけらもなかった。どこへ行ってしまったんだろう。

旧暦の日付けをたどっていくうちに、おやっと思った。

へなんだ、今年は「年内立春」ではないか  
俳句の季語に「年内立春」というのがあるのは知っていたが、過去の季語として気にも留めなかった。しかし、現実には直面すると、

そうも言っていられない。早速、日本大歳時記を繙く。

年内立春（冬の春・年の春・年の内の春・除日立春）Ⅱ旧暦で新年の前に立春が来ること。

年が明ける前に立春が来るという不思議な感じは「古今和歌集」巻頭の在原元方の歌「年のうちに春は来にけり一とせを去年とやいはん今年とやいはん」というようによく詠まれている。とまどっているようにも見えるが、実は春が早く来たことを喜んでいるのである、と山下一海は解説しているが、

春やこし年や行けんこつせり小晦日

芭蕉

連歌師の去年とやいはん冬の春

許六

としのうちに春は来にけり茎の味

大魯

おしかけて来る春せはし煤すすの中

蝶夢

年の内に春は来にけりいらぬ世話

一茶

等々の例句（一部「最新俳句歳時記」）で見る限り前記の歌を本歌としてゐるのは明白で、それだけに見るべき句がないとも言える。芭蕉の句も「廿九日立春なれば」の前書が初めて初めてこの句は成立する。明治以後の作家の例句がないのは、太陰暦が明治五年に廃止されたことによるかと思うが、江戸期には数年に一度めぐってくるのが珍しかったのであろう、除日（とぎにち除刑日）。重要な祝祭日や將軍の忌日などにより刑罰を執行しないことを定めた日）扱いされていたようである。

在原元方の歌があまりにも目立ちすぎたために、「年内立春」を主題にした初めての歌のように思われがちだが、「万葉集」卷二十（四四八八）の、「十二月十八日、大堅物三形王宅に宴する歌」と前書した「み雪降る冬は

今日のみうぐひすの鳴かん春へは明日にしあ  
るらし」という三形王の歌が初出である。冬  
は今日（十二月十八日）のみ、と節分を、そし  
て、春へは明日、と立春を匂わせているが、  
元方の歌に比べて表現が直截でないのは、来  
客への挨拶の歌だったからであろう。この日  
は前後の歌から類推して、天平宝字元年（七  
五七）の十二月十八日と思われるが、今年の  
立春は旧十二月二十日だから、奈良にいれば  
千二百四十四年前の三形王の気分を味わえる  
かもしれない。近年は暖冬気味とはいえ、当  
時の気温とそれほどかけ離れているとは思え  
ないから。

酒屋のカレンダーは、思いがけず私を万葉  
時代にまで引き戻してくれた。いつ陰陽道が  
日本に入って来たかは定かではないが、大宝

令(大宝元年―七〇一年)で、天文・暦数・卜筮・地相等をつかさどる陰陽寮が設置されているから、すでに三形王の時代には定着していたと考えて差し支えないだろう。

へ一年ぐらいなら、五行説に従って行動するの悪くないか」

一応の指針にするだけで、私は決して「暦法」にがんじがらめにされるつもりはないが、一つのものに律されて行動すれば、何か真理が掴めるのではないかと思ったのである。

へしかし、障害は多いだろうな」

カレンダーと手書きの方位表を前にしてぼんやりしていると、女房がやって来て、

「八卦見でも始めるつもり？」

と言う。早くも第一の障害が現れた。

「そのつもりだ。そのためにはネタ本になる

『神宮暦』ってやつが欲しいな」

やむなく、こちらも五行の精神で対抗する。

「私、晩年は幸せになるって昔言われたことがあったけど、幸せじゃないからまだ晩年じゃないのよね」

私の言葉は全く無視して、女房は勝手なことを言う。

へ何言ってるやがる、俺と同じ五黄土星のくせに。……幸せというのはな、その日その日を無事平穏に過ごせることを言うんだ」

と言いたいのを我慢して、

「お元気で結構ですよ」

と言うと、

「どいてどいて、埃だらけじゃないの」

と、乱暴に机の上にはたきをかけ始めた。

平成三年も、前途多難な年になりそうだ。

## ○『浄土』表紙版画絵販売についての一案内

『浄土』二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 千102 東京都千代田区飯田橋一―一六

法 然 上 人 鑽 仰 会    振 替 (東京) 八―八二―八七

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

話  
の  
旅  
(七)

超  
常  
物  
語

④

まつ うら ぎょう しん  
松 浦 行 真

(浄土宗出版室長)

ガダルカナル島で現地踏査に明け暮れていたある日、私たちはイル川河口へむかった。

そこは北海道旭川の歩兵第二八連隊の第一大隊を中心に構成された一本先遣隊

が、あつという間に壊滅した戦場である。イル川河口付近は砂州で、雨季以外はチヨロチヨロとしか水が流れておらず、そんなだから干潮の時には川は消えて地続きのようになる。

海に沿った砂州の長さは一キロ弱ほどもあるが、ジャングルが張り出してきているので、幅は広いところで一五〇メートルくらいだったかと思う。その猫の額のように狭いところに一木先遣隊は閉じ込められ、周囲を米軍に包囲されて、戦死者七六二名、負傷約三〇名、捕虜一五名という犠牲を出した。

その密林を少し切り開いて、あたかも戦場に臨むかのような形に、旭川歩兵第二八連隊将兵の霊を慰める石碑が建っていた。私が取材に先だって、一巻の経を上げたことはいまでもない。

ところが、である。カメラをしきりに覗いていた金子君が、

「おかしいな。目がチカチカしてフアイ

ンダーが見えない」

と言いだした。

「なんだって？」

「キラキラと光のようなものが降ってきて、対象がぜんぜん見えないんだよ」

そう言って、彼はしきりに目をこすっている。

その日は珍しく曇天で、海も空も暗く、とても光りが降ってくるような日柄ではない。

「おとうちゃん（と、彼はふざけて私をそう呼んでいた）、すまないけどもういちど、お経をあげてくれないかな。オレもいっしょに拝みたいから」

そういえば彼は、今度の南太平洋の取材行で、私がお経をあげている姿を写真

に撮ったりすることはあっても、自身で手をあわせることはいちどもなかった。

「いいとも」

と、私は快諾して『四誓偈』を誦經し、二度目の供養をした。その間、彼は神妙に私の後ろで合掌していた。

終わって、カメラを構える彼に、私は言った。

「どうだ、見えるか」

「うん。ぼんやりとだけど、見える」

実際にファインダーを覗くのは彼だから、見えるにしろ見えないにしろ、それがどんな様子なのか、私には正確にはわからない。しかし以上は、すこしの粉飾も交えず、ありのままを追憶して書いたものである。そして今も、不可思議な思

いがしていることを、つけくわえておく。  
しかし、他の取材地では起きなかった現象が、なぜここで起きたのか、私には何となく想像できる気がしている。

昭和十二年（一九三七）七月七日に勃発した支那事変（俗称日中戦争）は、暗夜に北京西郊の蘆溝橋で放たれた犯人不明の銃声から始まったものだが、一木先遣隊の隊長・一木清直大佐は当時、現場の大隊長としてそもその発端から渦中にいた人である。その時のみごとな指揮ぶり（びんぎ）で間もなく歩兵学校の教官に拔擢され、以後ずっと教育畑を歩き、実兵指揮の權威者といわれた。

その一木大佐が歩兵第二八連隊長に補されたのは太平洋戦争の始まる直前で、

開戦すると間もなく一木支隊を編成し、ミッドウェー占領部隊として出征した。

しかしこれは日本海軍がミッドウェー海戦で大敗北を喫したために、旭川へ引き返す途中で、ガ島奪回作戦に転用されたのである。

一木大佐の名誉のために書いておくが、支隊の一部で編成された一木先遣隊があえなく玉碎したのには、他動的な二つの誤断が大きく影響していた。

一つは、ガ島奪回作戦への転用命令を受けたとき、上級機関の参謀たちから、「米軍のガ島上陸は飛行場破壊のためで、その目的を達した今、一刻も早く撤退しようとしています。早く行かないと間にあわなくなる公算が大です」と誤っ

た情報を与えられ、せかされたことである。このため一木先遣隊はガ島に上陸するなり、ほとんど休息らしい休息もとらず、米軍のいる西方へ西方へと進んだ。

もう一つは、上陸して捕まえた米軍のために活動している原住民から、米軍陣地の位置を誤って教えられたことである。もっともこれはその原住民の故意によるものではなく、米軍の地図そのものが川の名を誤って記していたことに原因があった。

このため一木先遣隊は、実際に米軍陣地のあったイル川左岸を通過点とし、戦闘地域をその後方の（ということはイル川よりさらに西方の）、日本軍名ヤモリ川（米軍名ルンガ・ラグーン）に想定したため、夜

間に敵前のイル川河口へ密集隊形で突込んで米軍の集中砲火を浴び、ついには包囲され、短時間のうちに殲滅せんめつされることとなったのである。

いってみれば一本先遣隊は、無為に死ぬためにガ島へ渡ったようなもので、いずれも万斛ばんこくの涙を飲み、深い怨念とともに生を終えた人たちなのだった。金子君のカメラのフラインダーを、キラキラ光る光の細片でさえぎったのは、その怨念ではなかったらうか。

私がこれまで書いてきたのは、言葉を変えて言えば、「死者からの通信」ということに他ならない。

こんなことを言うと、

——本気かね。

と、胡散うさんくさい目で見られかねないことは、この編の冒頭に記したとおりである。(本誌平成二年二月号)

しかし実は私は、その「死者からの通信」を、体験したことがあるのだ。

私は「靈魂」が存在しているかどうかを証明するなんて、そんな大それたことはとてもできない。あるということもできないし、ないという証明もできない。

ただ体験を通じて靈の存在を一個の事実として知っているにすぎない。もっともそれが「靈」と呼べるものかどうか、それはわからない。というのが、心理学者によると、「靈魂」の定義というのはい

まだにできていないらしいからである。

その私の体験というのは、昭和四九年

三月初旬のことであつた。兵庫県篠山の  
自坊に帰っていた私は、いよいよ明日、

東京の会社へ帰任することにして、近くの  
寺院のご住職に、留守中、予定しない  
寺務が起きた時のことをお願いする電話  
をしようと、玄関の間に入った。そして  
電話番号を調べているときであつた。ま  
ぎれもなく背後の、本堂に通じる襖があ  
いた気配がして、とたんに襟首から氷片  
を落し入れられたように、ゾーッと鳥肌  
の立つ思いがした。

とっさに私が思ったのは、

——出たなッ。

ということであつた。私はゆっくり

と、あたかも背後をうかがうかのように  
半身に開きつつ、首を回した。

何も見えない。

もちろん襖は、閉まったままである。

私はとっさに、玄関と茶の間のさかい  
の襖をあけ、正面に見える柱時計を見  
た。針は午後九時一六分をさしていた。

それを確認し、すでにかなりの衝撃を  
うけていた私は電話をやめ、茶の間に入  
り、掘り炬燵こたつにすわった。妻は風呂に入  
っていた。

(いったい誰が何を報らせようとしたの  
か)

と私は考えた。思い当たることは、一  
つしかない。肉親の死である。

私には、ともに五つ違いの兄と妹がい

る。はて、どっちがいけなかったのか。

電話で確かめようとして、おっと待ったと、私はたたたらを踏んだ。いくら兄妹でも、「まだ生きてるか」などとは聞けたものではない。変事があれば向こうから知らせてくるだろうと、私は待つことにした。

やがて妻が、風呂から上がる。しかし妻には何も言わないことにした。怖がらせてはいけないと思ったからである。私は寢酒をのんでから居間にはいり、寝ながら本を読んでいると、果たして、

——リリリリリ——

である。妻を制して私が出ると、

「和尚おっさんですか」

オヤ、と私は思った。総代の声だった

からである。

「Kさんが、死にましてな」

「何時だった？」

悔みより先に、その言葉がでた。

「ちょっと待っとくはなはれや」という声に続いて、「おーい、何時やったァ」と、大声で家族に聞く声が、電話の向こうで、した。

「九時一八分やったそうです」

あれがあったのと、わずか二分しか違わない。私はすぐに察した。Kさんは私に引導をわたさせようとして、東京へ行くこととするのを引き止めにきたのだ。

「しかし和尚はあす、東京へ行かはるんでしょう。一日、延ばしてもらえませんか」

と、総代が言う。

Kさんは律儀な人だった。私より二〇歳以上も年長なのに、まだ小学生の私が休日、大阪から丹波へ遊びに来ているのに出あったりすると、丁寧<sup>ていねい</sup>に挨拶をくれたりした。それで私は小さい時からつよい印象と親しみをもっていたのだった。

そのKさんが卒中で倒れたのは、亡くなる三年ほど前のことである。発病して一年目くらいから、リハビリに杖を頼りによく散歩していたが、三月<sup>みづき</sup>ほど前にはつたり道で出会った時にも、

「もう私も近うおます。その時はどうぞ一つ、よろしゅうお頼み申します」

と、拝むようにして言うので、

「そもそもKさん、しかと引き受けた。」

けれども人間はいやでも一度は往生するんやから、相なるべくはゆっくり行きなさいや」

そういつて別れたのだった。そんな仲だったから、Kさんの引導はなんととしても私がわたさねばならない。上京の一日延期くらいは当然であった……。

つい一部始終を記してしまったが、私にはそんな超常体験が、あった。それまでは、

「——この世にユーレイなんているものなら、いちど会ってみたいもんだね」などと嘯<sup>うそ</sup>いていたりしたが、このとき以後、その言葉を口にしたことは一度もない。

(つづく)

## ◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。

一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度

一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

### 「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十七巻 二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成三年一月二十五日 印刷

平成三年二月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三（三三六二）五九四四

〒一〇二（振替）東京八一八二一八七

新刊

法然上人

# 浄土三部経講説

B 6判五四二頁  
価四、五〇〇円

法然上人撰述の無量寿経釈、観無量寿経釈、阿弥陀経釈の原典を訓読註解して和訳し、更に和字三経釈の原典を註解和訳したものを加え、本宗所依の経典に対する宗祖の明解な義解を記す

## 浄土宗勤行の解説

B 6判三六六頁  
価三、六〇〇円

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B 6判四二四頁  
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B 6判二九六頁  
価二、九〇〇円

全訳

法然上人

勅修御伝

B 6判八四七頁  
価六、八〇〇円

註典

和訳浄土三部経

選択集

B 6判四七四頁  
価二、五〇〇円

訓聖典

和訳法然上人

観經四帖疏

B 6判三八七頁  
価二、五〇〇円

原典の四

和訳善導大師

六時礼讃

B 6判五八四頁  
価三、五〇〇円

和訳

善導大師

六時礼讃

B 6判二六五頁  
価二、四〇〇円

○葉書でお申込下さい。代金（送料実費）は後払（振替用紙同封）

編と訳 村 瀬 秀 雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

發行所 常 念 寺

電話 0465-43-1352

振替 横浜 3-8296番

第五十七卷

二月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行  
平成三年一月二十五日印刷 平成三年二月一日発行